

いても、先述した妙一尼への書簡中で、成仏の確かなことを保証している。ここに、色説が成仏の因となることを確認できるように思う。(A)、(B)にて触れた善因もこの因果関係に準ずるものと考えたい。

以上、甚だ概略的であるが安心に関すると考えられる遺文中の説話を整理してみた。その結論として次の二点を挙げることができる。

(一) 理想的人間の規範については倫理観に関する説話によく表われていた。

(二) 成仏の確実性については何れの説話の構造も、悪因苦果、善因楽果であることより、四威儀に通ずる受持が善因となり、そして、楽果に至ることである。

※紙教の都合により註は省略した。

## 「常不軽品の解釈について」

小 野 文 班

常不軽品は、法華經の悉有仏性思想の典型的な文とされ、法華信仰の勃興時より今日に至るまで仏性礼拝の実

践として尊崇されてきている。仏教思想史を色どる最も著名な教義論争は仏性論争であるが、その一方の雄となつた法華一乗の徒の抛り所に、この不軽品の故事があつたことは周知の事実である。ところが日蓮聖人は悉有仏性と積された不軽品から、「仏性」ではなく、「仏種」という教理を構築し、その宗教の中心にすえている。聖人のいう仏種が、それまでの仏性思想と明らかに異つた概念をもっていることは、『唱法華題目抄』(二〇四頁)『本尊抄』(七〇六頁)『顯仏未來記』(七四〇頁)『曾谷入道殿許御書』(八九七頁)等、不軽品にふれた諸御書から指摘できる。不軽品からこのように仏性と仏種という両義が生まれる以上、もう一度不軽品の解釈の史的展開をふり返り、そこから聖人の仏種思想を規定せんとする試みも必要なことだと思われる。そこで今回はその基礎的作業として法華思想の潮流の中から、世親・天台・吉藏・窺基・妙楽・伝教・源信の注釈を概観し、比較検討することにした。

世親は一方では唯識論書を作って、五姓各別の法相派の基を開いた人物であるが、その一方でインド現存唯一の法華經注釈書を残している。そしてこの『法華論』が不軽の礼拝を仏性礼拝と規定したのである。この『法華

論』の注釈はその後の天台・吉藏・窺基・妙楽・伝教・源信に継承され、不輕品の見方を決定したといえる。この書の法華思想に与えた影響は大きいが、聖人は『開目抄』（五七九頁）の中で、『法華論』の種子無上を取りあげて法華經の種と一念三千を結びつけて、独特な仏種論を展開している。聖人が世親の注釈で注目したのは仏性ではなくこの「種子無上」であった。世親は不輕の弘教に關しては、仏性の有無からではなく、機根の熟・未熟から論じている。この立場は天台にもみえ、不輕品の思想と、不輕菩薩の弘教とを分けて解釈している。『文句』では最初に五仏性で「不輕の解」、すなわち不輕の悟りの内容を説くが、不輕の行については一転して、「本未有善」なるが故に「而強毒之」という逆化への弘教法をとったというのである。本有の三因仏性を論じながら「本未有善」というのは矛盾であるが、そこには性得の

場という不輕の理と、修得に約して述べる不輕の行との相違があったとみるべきである。妙楽は『文句記』で明確に不輕の四衆を逆化とし、「結縁に約して一乘の実を表す」と釈している。彼は三因仏性を性に對し修に約し、了因・縁因の二仏性を修得の智と断とし、菩提・涅槃という果性・果々性はこの修得の縁了の果に至るをいうと

する。ここに「本未有善」の義が明瞭となる。聖人が「本未有善」なるが故に因果具足の「教」を種として下さねばならないとするのは、修得縁了の立場から当然の帰結なのである。

これに對して吉藏もまた不輕の「行菩薩道」を正因仏性に對する縁・了とみ、因を行ずる修行により仏性が成就すると釈している。しかしその『法華義疏』では、不輕の弘教に關しては天台妙楽とは反對に、末世の増上慢の機なる故に頓説すべからずと釈した。窺基は更に不輕の行は安樂行であると『法華玄贊』で述べている。妙楽の『文句記』はこの窺基の説を論破すべく筆を尽し、不輕行と安樂行の相違を十ヶ条にわたって強調している。のちに日蓮聖人が不輕菩薩の行軌を正しく折伏行と規定するのはこの妙楽の説を受けていることは確かである。

日本天台にくると、その宿命的な法相との仏性論争が思想形成に大きな影響を及ぼし、真如隨縁論が教義の中心に位置づけられ、「本未有善」の不輕の行は黙視されてきた。伝教の『三平等義』にも不輕の仏性を釈しているが、本未有善なるが故に行仏性はなく理仏性をいうのだとしている。明らかに法相の行仏性を否定し、真如理仏性説を樹立せんとしている。この日本天台成立期の仏

性論に、密教思想が積極的に受容されると、その行きつくところは観念的な仏凡一体論で、日本中古天台が真如遍滿をいう余り、本覚ずわりの著しい即身是仏主義に墮つてしまったのも当然のことと思われる。法然・親鸞・道元・日蓮と叡山を捨てた鎌倉仏教の祖師達には、その思想の底に、この中古天台の観念的な仏性論＝成仏論を拒否して起った共通した宗教意識がある。それは教・行・信の具体的実践への志向である。聖人の場合は下種論に頭われている。しかし、鎌倉仏教をみるその前に、日本浄土教の祖と仰がれる源信の仏性論を検討しておく必要がある。『一乗要決』で天台の仏性を強調した源信が、その仏性開発を弥陀の仏力に求めんとしたその傾向は、形としては聖人の仏種論に一脈通ずるものがあるからである。ただし、常不軽品を下種折伏の文証とし、その二十四字と五字の題目を一体とする聖人の仏種思想が、独特なものであることはいうまでもない。

## 久遠釈尊の因行果徳について

庵 谷 行 亨

天台大師は法華經壽量品の「我本行菩薩道時所成壽命」に本因妙、「我成仏已來甚大久遠」に本果妙を論じ、久遠釈尊の因行を本因、釈尊の久遠成道を本果と規定している。日蓮聖人はこれを継承して「我本行菩薩道：」に「我等己心菩薩」、「然我実成仏已來：」に「我等己心釈尊」を論じ觀心の法門を説示されている。特に『観心本尊抄』の釈尊論には釈尊の因果論が大きな比重を占めており、これが觀心法門の論理的帰結を導くのである。以下『観心本尊抄』を中心に釈尊の因果論について考察してみたい。

聖人が因位果位を論じられている主要な遺文として『開目抄』『観心本尊抄』『法華取要抄』等を挙げることができる。これらの遺文によると①釈尊と他の諸仏を比較対して因位果位を論じる場合、②本門と迹門を比較対して釈尊に因位果位を論じる場合、③釈尊の久遠成道に因位果位を論じる場合などが指摘できる。